



Title	日本語と中国語における分配量化と全称量化の生成文法による分析 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	張, 瑩
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16488号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94859
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Ying_Zhang_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 張 瑩

学位論文題名

日本語と中国語における分配量化と全称量化の生成文法による分析

・本論文の観点と方法

本論文は、日本語と中国語における分配量化と全称量化に関わる量化詞を比較対照し、文における語順の問題を対象とする統語論において重要な位置を占める言語理論である生成文法の枠組みを土台とし、文の意味を論理学的手法で明らかにする形式意味論の視点も導入して分析を行ったものである。従来研究が進められてきた英語の量化詞に関する分析をもとに、中国語の「各」、「都」及び「全」、さらには日本語の「それぞれ」、「～ずつ」、「～とも」並びに「全～」について、その意味機能とそれが生起する文の構造を詳細に分析しており、従来の研究では明らかにされていない各要素の特性の違いを明示するとともに、日本語と中国語の分配量化と全称量化に関する共通点と相違点を理論的観点に基づいて説得的に説明している。

・本論文の内容

本論文は、序章、本論1章～9章、結論からなる。1章では、分配量化表現の構造と機能について、本論文の分析の土台となる Safir and Stowell(S&S) (1988) と Beghelli and Stowell (1997) の分析を提示した上で、日本語の「それぞれ」に関する坂口 (2006) の分析を概観し、その問題点を指摘する。分配量化子が動詞句 VP 内に生起し、分配される要素に関わる機能範疇 DistP の主要部に移動すると仮定し、分配される要素である分配名詞句(D-NP) と分配される範囲を示す範囲名詞句(R-NP) の概念をすべての分配量化表現に適用可能だと主張する。

2章では S&S (1988) の提案を批判的に検討し、英語の each を形式面から名詞後置の each と副詞位置の each と分類した上で、名詞後置の each は変項を明確にする要素であり、副詞位置の each と非選択的束縛の関係にあること、さらに副詞位置の each は分配量化子として機能し、R-NP と D-NP を明確に区別する機能を持つことを示す。名詞後置の each が用いられる場合には空の副詞位置の EACH が想定されるとともに、副詞位置の each は R-NP となる複数名詞あるいは全称量化子と述語動詞との間の位置に現れ、出来事の項となる D-NP を C-統御するという構造的関係にあると主張する。

3章では、日本語の「それぞれ」と「～ずつ」について考察し、「それぞれ」は主に複数名詞句や全称量化子に作用し、それが作用する名詞句は R-NP として解釈されると主張する。「それぞれ」は英語の副詞位置の each に相当し、分配量化子として働く要素であり、VP 内で生起し、DistP の主要部まで移動し、さらにその移動元と「～ずつ」のついた助数詞句を非選択

的に束縛すると分析する。一方、「～ずつ」は名詞後置の **each** に相当し、「それぞれ」の変項を明確にする役割を果たすと主張する。

4章では、中国語の“各”は動詞の直前に現れる“各”と、直接目的語と助数詞句の間や二重目的語構文の着点要素 **goal** と対象要素 **theme** の間に現れる“各”の二種類があることを示し、前者は日本語の「それぞれ」に相当するのに対して、後者は変項につくという点では日本語の「～ずつ」に類似しているが、分配量化子として働くと主張する。さらに、前者の“各”は名詞後置の **each** 、「～ずつ」と同様に内項も外項も **R-NP** に取ることができるが、後者の“各”は内項しか **R-NP** に取らず、日本語も英語も **VP** 内に変項がなくても文が成立するが、中国語の場合は **VP** 内に必ず変項がなければならないことを示し、その理由を理論的に説明する。

5章では、“都”の機能と構造について、“都”を分配量化子や加算量化子として扱うのではなく、全称量化子とすることを提案する。“都”構文では、“都”の姉妹位置には“毎（一）～”が存在し、両者で **ALL-EVERY** という構造を成し、“毎（一）～”と共起しない場合でも“都”の姉妹位置には空の **EVERY** が存在すると仮定する。さらに、“都”構文は、“都”と **EVERY** は時制に関わる機能範疇 **T** の指定部で生起し、“都”が量化詞繰り上げし、話題化に関わる機能範疇 **TopP** に移動した全称量化の対象となる名詞句と、**EVERY** を束縛するという構造になると提案する。また、Reinhart (1997) の提案した選択関数を用いて、例外が言及された“都”構文では、自由変項 **Cov** の値が選択関数によって限定されると分析する。

6章では、中国語における全称量化にかかわる“全”について、“都”と比較した上で、“都”も“全”も全称量化子であると主張する。ただし、“都”は先行詞を明確な単位で量化するのに対し、“全”は先行詞が量化される単位が不明確な集団名詞であると解釈する。この違いは、構造的には“都”は常に **EVERY** という変項を随伴し、**EVERY** を通じて全称量化の単位を明確にするためであると説明する。また、“都”と“全”の組み合わせにより、二重全称量化が実現されることも示し、最大値読みを確保する機能を持つ領域制限子に当たるのは項が生起する位置である **θ -position** にある“毎（一）～”であると主張する。

7章では、日本語の「X とも」と「全 X」について考察し、「X とも」は中国語の“都”と類似した振る舞いを示すことから全称量化子として機能し、**ALL-EVERY** 構造を構成すると主張する。特に、「X とも」の先行詞が文脈によって最大値読みとならない場合があることから、「X とも」も **Cov** を持つと考える。「全 X」については、副詞的用法と名詞的用法で異なる機能を持つとし、副詞的「全 X」は最大値を確保する機能を持ち、**ALL-EVERY** 構造における **EVERY** として働くのに対して、名詞的「全 X」は中国語の“全”と類似し、先行詞が一つのまとまったものとして解釈されることを主張する。さらに、日本語の「X とも」と副詞的「全 X」の組み合わせでは二つの **ALL-EVERY** 構造で二重全称量化が実現されるのに対して、中国語の“都”、“毎（一）～”と“全”の組み合わせでは一つの **ALL-EVERY** 構造で二重全称量化が実現されると説明する。

8章では、日本語の「それぞれ」と「～ずつ」、中国語の詞位置の“各”と名詞前置の“各”が共起した場合の機能について、日本語では、同一節内で共起した「それぞれ」と「ずつ」が同じ

要素にかかることも可能であれば、別々の要素にかかることも可能であり、一次分配量化も二重分配量化も構成できるのに対して、中国語の副詞位置の“各”と名詞前置の“各”が共起した場合は必ず二重分配量化が構成されることを示す。また、中国語の副詞位置の“各”と名詞前置の“各”は同時に同じ要素を R・NP に取ることができないが、日本語の「それぞれ」と「ずつ」は同一節内で共起した場合、同じ要素にかかることも別々の要素にかかることも可能であると説明する。両言語の違いについては、中国語の副詞位置の“各”と名詞前置の“各”はいずれも分配量化子であるのに対し、日本語の「それぞれ」は分配量化子であるが、「～ずつ」は分配量化子ではないためであると説明する。

9章では、全称量化子と分配量化子の組み合わせによる一次分配量化と二重分配量化について考察し、日本語の「X とも」と「それぞれ（～ずつ）」の組み合わせについては、同じ要素に作用する場合は一次分配量化を構成し、異なる要素に作用する場合は二重分配量化を構成すると分析する。中国語の“都”と“各”の組み合わせについては、“都”と副詞位置の“各”に“都各”と、“都”と名詞前置の“各”による“都～各”との二つに分けて分析を行う。“都各”は同じ要素に作用する場合と異なる要素に作用する場合があり、前者の場合は一次分配量化を構成し、後者の場合は二重分配量化を構成する。一方、“都～各”は必ず異なる要素に作用し、意味的二重分配量化を構成すると説明する。